

保育者養成校における「子育て支援」に対する授業展開

Class development for “the child care support” in the childminder training school

中 島 啓 子*

Keiko NAKAJIMA

I. はじめに

現代社会では核家族や少子化が進む背景の中で、子育て家族は地域社会から孤立していく現状がある。家庭支援においては、保護者との連携し共同して子育てを行うための社会的支援が求められている。2018年4月から実施されている保育所保育指針と幼稚園教育要領では、保護者と連携した子どもの育ちの支援と子どもの育つ環境への総合的支援の視点が強調されている。

「子育て支援施策」の展開の経緯を授業の中で追った。資料は「平成29年度版少子化対策白書」(2017年度P.47)を取り上げた。子育て支援施策が本格的に始まったエンゼルプランから始まり1990年(平成2)年の合計特殊出生率「1.57ショック」を契機に仕事と子育ての両立支援などの子どもを産み育てやすい環境づくりに向けての対策の検討を始め、取り組むべき基本的方向と重点施策を国が定めた。

この変化に対応するため保育所保育指針の改定等を踏まえ、子どもの育ちや家庭支援の充実の内容が、養成課程でも重要となる。子育て家庭への支援者としての保育者の立場の理解が、保育へ携わる学生に求められている。

子育ての実感を持たない学生に対し、子育て支援に視点を向けさせるために、自分の生まれ育ってきた地域の「子育て支援施策」を調査することで、地域の子育て支援施策に触れることで認識を深めることで実感をもった学びに繋がると考えた。さらに、子育て家族に少しでも元気になる、子育て仲間の繋がり場としても考えられるサロンの企画も取り入れた。学生が「子育て支援」への理解を深めるために学びの内容の有効性を考え、実践した内容を振り返ってみる。

II. 社会背景の理解

子育て家庭の社会背景には、「少子高齢化」という状況がある。複数の講義の中で、この現状を取り上げてきた。「少子高齢化」という言葉は知っていても、どのように人口が変化して、現状はどうなっているのか把握しにくいものがあった。そこで3種類のグラフを提示することによって、比較させた。取り扱ったグラフは、「人口ピラミッド」「出生数および合計特殊出生

*北翔大学短期大学部こども学科

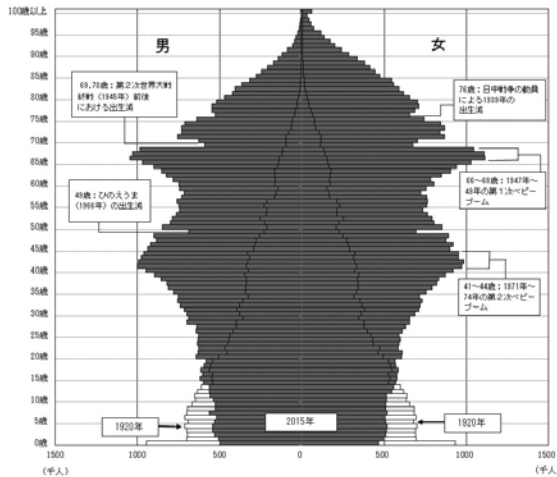


図1 人口ピラミッド (出典 総務省統計局 HP)

率の推移」「全国・北海道・江別市・札幌市の合計特殊出生率の推移」である。

平成27年(2015年)国勢調査(抽出速報集計)の結果による日本の人口ピラミッドである。

上の方の隆起は、いわゆる「団塊世代」(66~68歳, 1947~49年生まれ) 下の方の隆起は、いわゆる「団塊ジュニア」(41~44歳, 1971~74年生まれ)である。

団塊世代に当たる66歳人口は216万人、団塊ジュニアにあたる41歳人口は197万人となっており、1歳児人口100万人の2倍前後にも達する。(総務局統計局解説より)

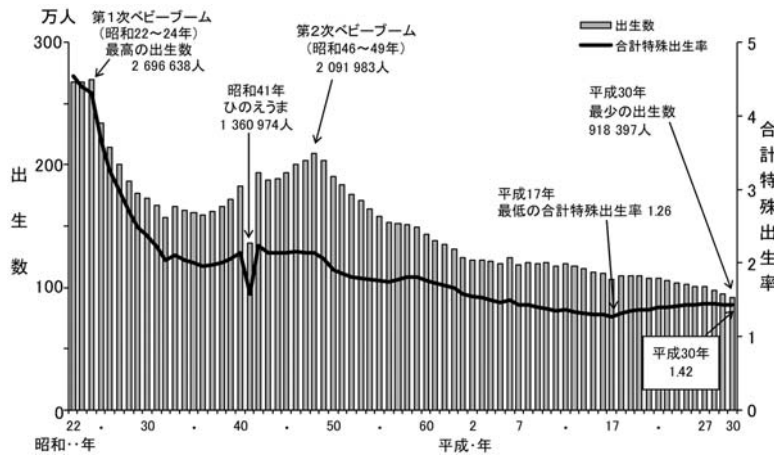


図2 2018年人口動態統計月報年計 (出典 厚生労働省)

厚生労働省は2019年6月7日2018年の人口動態統計月報年計を発表した。出生数は前年度比2万7,668人減の91万8,397人で1899年の調査開始以来過去最少となった。

合計特殊出生率は1.42, 3年連続の減少となった。

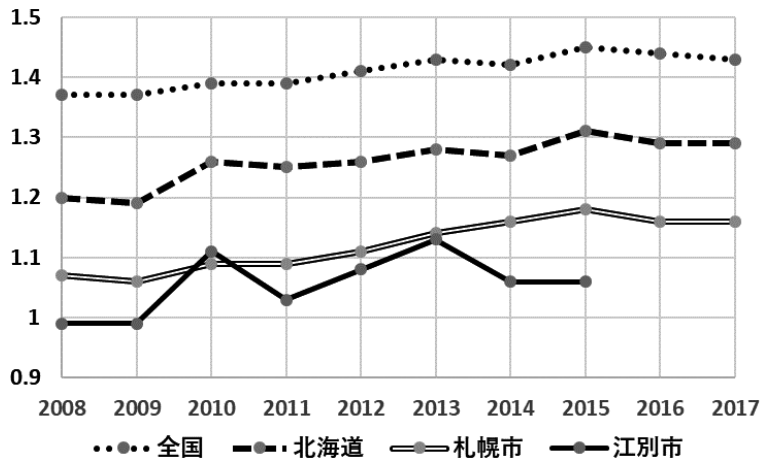


図3 全国・北海道・江別市・札幌市の合計特殊出生率の推移
※北海道情報統計局統計課のデータ及び江別市役所に問い合わせたデータを基にグラフを作成

北海道に特定し、江別市・札幌市と比較する。

全国的な現状・北海道の現状・札幌市の現状・江別市の現状を表記したグラフである。札幌市・江別市の状況は、北海道平均よりも減少傾向。

Ⅲ. 授業での取り組み

1) グラフを使用した現状把握

この3種類のグラフから、「少子高齢化社会」社会の現状を学生はすでに知識として理解してはいたが、年齢別人口の分布については把握できていなかった。今後の状況については曖昧であった。「人口ピラミッド」のグラフからは、現在の人口での自分の年齢層の10年後、20年後、30年後を想像すると、今の人口のまま推移し、決して現在の30代、40代、50代の数には及ばない状況を捉えた。

「出生数および合計特殊出生率の推移」においてテキストで使用したグラフは、2016年のデータであったが、学生の感想の中で上記の結果は予測されていた。少子高齢化の影響は経済面や社会面にも大きく影響することに納得した。

「全国・北海道・江別市・札幌市の合計特殊出生率の推移」は、全国的な現状を押さえながら、より身近である北海道を考え、大学のある江別市に在住している学生や近隣の札幌市から通学している学生に身近に感じることができるよう、視点を変えていった。

3種類のグラフから、自分の年齢→日本の出生数・合計特殊出生率→身近な北海道（江別市・札幌市）に視点を変えていった。自分事として考えるのは、難しいことではあったが、自分が置かれている社会の現状を知ることによって、少しは現状を受け止めることに繋がってきた。

学生の感想を取り上げると以下のものであった。

- ・ どんどん高齢化社会になって、若年層の負担が増えていくことが目に見えていると感じた。
- ・ 全国と比べて札幌市も合計特殊出生率が低く北海道の政策があまりよくないのかと思った。
- ・ 昭和22年～平成25年まで比べると合計特殊出生率は1/3、出生数は1/2に減少して少子化が進んでいることが分かる。
- ・ 北海道の合計特殊出生率は低く、さらに札幌市、江別市が低く、全国でみても北海道だけでみても大きな問題である。
- ・ 経済的支援を増やし、子どもが欲しいと思うことができる環境をつくる必要がある。

しかし、「少子高齢化」社会の状況は、知識として理解したもの実際には、自分事として考えるには実感が学生にはまだ伴っていない。就職して所得税を支払い、税金で国を支えているという現実を経験し、社会の動きや政策を感じるまでは時間が必要であろう。「子ども・子育て支援新制度」のプランと施行の2年間の流れは、講義の中で取り上げたので、消費税10%の実施も実感は伴っている。3歳児以上の保育の無償化については、実習期間にも関わっていたので、現実的な問題として導入からの経緯は知識として学んでいる。

2) 映像を通して子育てに悩む母親への理解

少子化の原因の幾つかを学ぶ中で、仕事と育児の負担感の増加や個人の多様な生き方（結婚

観・価値観等)が浮かび上がる。孤立したり、育児不安になったりする子育て家庭・保護者への理解を深めることが重要であるが、その現状を知ることが必要である。そこで、母親の育児不安を取り上げたDVDを視聴させた。視聴教材として、NHKが制作したドキュメンタリー「ママたちが非常事態!？」を活用した。放映された直後に世の中でも話題に上った番組であった。

子育てに悩む都会の母親を中心に、脳やホルモンの働きを親や子ども側からの実験や事実を基に、母親の子育てに対する不安を科学的に解明した内容である。その中で、都会の中に核家族で暮らし、帰宅の遅い夫との毎日の中で、子育ての悩みを抱える母親の姿を取り上げていた。また、夫の育児への関わり方にイラつく妻の姿や、夫と子育てについて話す中でリラックスする母親の姿も取り上げられていた。映像の視聴の後の感想を4つにまとめると以下のようであった。

① 保育士としての立場から考えた感想

- ・母親になる前の人に物凄く見て欲しいと思った。養育・保育する時の知識になった。
- ・子育てママは不安や孤独を感じているのだと分かった。近所付き合いが弱い現代。ママ友の存在や理解者、協力者が大切である。保育者は身近な理解者になって、一緒に育てていくことができるので、親身になって関わっていきたい。
- ・保育士になった時に支援できるように頑張っていきたい。
- ・一人で苦しまないで、皆で支え合って子育てをしていくことを、保護者に伝えていける人間になりたいと考えた。
- ・寄り添う気持ちを忘れずに接することができるようにしたい。
- ・保育者は母親にとって心の拠り所であり、大切な存在であり、なくてはならないと改めて思った。
- ・保育士の仕事の大変さ、母親の大変さを改めて感じた。
- ・実際に研究したデータや体のつくりについて理解することは、母親を安心させるためにも、保育者の専門性を高めるためにも大切である。
- ・実習で子どもたちにたくさん関わったので、自分は「母性」は一般の学生よりも多く得ているのかと思うことができた。
- ・就職した時、母親の気持ちになって対応出来ると思った。
- ・話をするだけでも救われるということが分かり、勉強してきたことが役に立つと思った。
- ・自分の中でも役立てることができると思うので、学びを今後活かせるようにしていきたい。

② 知識が深めたことへの感想

- ・子育ての大変さが改めて分かった。
- ・イヤイヤ期について深く知り驚いた。
- ・孤独はエストロゲンの減少に起こることで、一見迷惑である仕組みも共同養育を促すため

に必要であることが分かった。

- バカ族の子育てはとても素晴らしいと感じた。古くは日本人も同じだったと思うと、核家族化の深刻さを改めて感じた。
- しっかり理由があることに安心した。
- 原因や理由を理解して関わることで、子ども理解に繋がる。
- 子育てについて科学の視点でみることができた。
- 当たり前と思っていたことに、脳の働きや体の変化があることや進化が深く関わっていることを知った。夫婦間のことなど何も今まで知らなかった。

③ 自分の家族への思いの感想

- 家族の素晴らしさや支え合うことの大切さを感じた。母に自分が産まれた時のことを、聞いてみたいと思った。
- 自分が母親になったら、旦那さんの協力をしてもらえるような接し方をしていきたい。
- 将来自分が母親になった時を考えることができた。
- 母が私に話していた辛さなどが、どうして起こっているのかを学ぶことができた。
- 育ててくれた母親に感謝した。

④ 子育てに関する感想

- 子育ての悩みは当たり前のこととは思わず、周りがサポートしていくことが、大切なのではないかと思った。
- 夜泣きやイヤイヤ期が発達として大切であることが分かった。子どもの発達を理解した上で子育てをすると少し余裕ができるし、夫婦協力して子育てができると思った。
- 母親に寄り添う人々が増えることで、産後うつやネグレクトが減るのではないかと思った。
- あまり赤ちゃんに関わらないので、子どもと触れ合う機会がもっとあったら良かったと思う。
- 子育てに対するイメージがまたガラリと変わった。不安を感じてしまうのは、仕方のない事、社会の変化に人間も社会自体も対応できていないこと、それでも人間は人間を育てていくことを不思議に思いつつ母親になる憧れが消えない事が人間の魅力だと感じた。
- 母親の状況を社会全体で認識し考えていかなければならないと思った。
- ママ友やSNSも悪くないと思った。ストレスや不安が軽減されるなら。
- 地域の子育ての子育て支援の重要性を改めて感じた。核家族化が進んでも、近所に助けしてくれる人が一人でもいたら、精神的にも身体的にも母親は楽になれる。

上記の感想からみると、地域の支援の大切さに対しても考えることができたようである。子育て家族が生活する地域社会にも目が向けられていた。また多くの学生は将来の保育士という立場で、自分事として子育ての悩みを抱えた保育士としての立場で感想をもった。保育士としての立場で考えることは、他の講義でも行われている。養成校としては他講義からの点として

の学びを線として繋げいくことが、学生の学びを深めることになることを改めて実感させられた。子育ての母親の悩む姿を、実際の映像で観ることによって理解することが効果を上げた。さらに自分の家族を振り返るきっかけとなった学生もいた。家庭支援論では、社会変容がもたらす家族の変化と核家族について学び、学生は核家族の実態についても知識だけでなく、自分事として捉えた。

産業構造が大きく変化したのは、明治後期から大正期と第二次大戦後の1955年以降である。第3次産業が中心となり、都市化や過疎化を促した。家族や地域社会の変容が子育て環境にも大きく影響を与えている。実家のある地域では、現在も近所との繋がりも深いと感じる学生が多い反面、希薄になっていく地域との関連を感じる学生も少なくなかった。子育てに悩みを抱える母親の姿を視聴して、育児には周囲の協力が大きな力となる事を知り、「共同養育」の重要性を改めて感じ、保育士の立場からの感想も多かった。

IV. 母親の子育てに対する悩みに対する学生の意識

子育ての悩みについての内容を、学生はどうとらえているのかアンケート調査を行った。主な項目については以下の結果であった。対象学生は2年生90名（当日出席者数）である。

- 1) 「家庭支援論」を学び、学ぶ前と学んだ後では家庭支援に対して意識が変わりましたか。
- 2) 子育てに悩む母親の悩みが、理解できましたか。

学ぶ前後の意識の変化

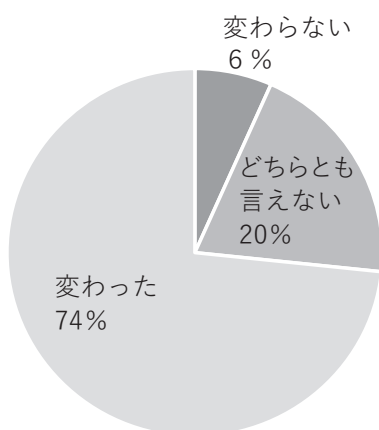


図4 学ぶ前後の意識の変化

子育ての悩みへの理解

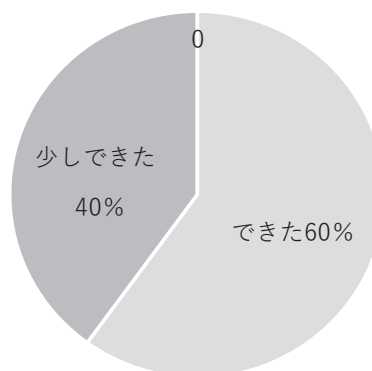


図5 子育ての悩みへの理解

「家庭支援論」において学ぶ前後では、「家庭支援」に対する意識に変化が見られた。変わらなかったという内容については、何故意識の変化が見られなかった要因について、授業改善として今後工夫をしなければならない。子育てに悩む母親の理解が、できた60%、少しできた40%であり、理解できない学生はいなかったので、意識は授業を通して深められたと考える。

3) 子育てに悩む母親の悩みはどんな事だと思いますか。

最も大きいと思うものを選びましょう。(5つ 複数回答)

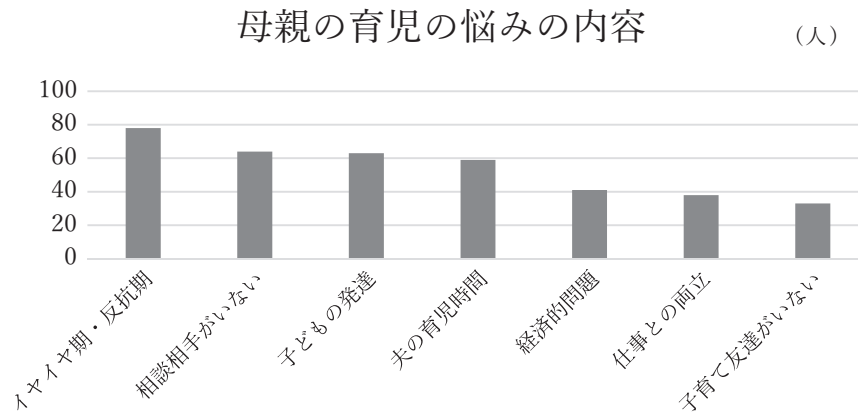


図6 母親の育児の悩みの内容

4) 地域の子育て支援事業を調べ、地域の子育て支援事業への理解に繋がりましたか。

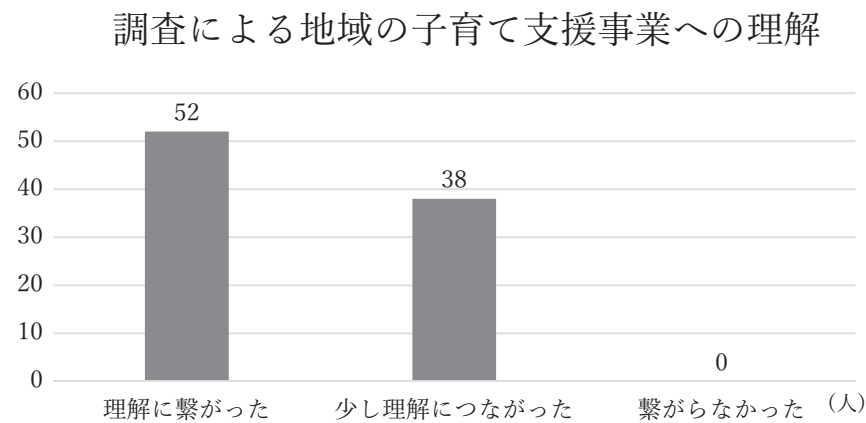


図7 調査による地域の子育て支援事業への理解

5) 子育て支援事業に関する要望はありますか。

- 親子が家から出て参加したいという事業
親子同士、子ども同士で触れ合う、学び合う機会
支援を行える施設の拡大、公園を増設
場所に関係なく支援（過疎地域におけるサロンや放課後児童クラブの場を設ける）
男性の子育て支援に関する意見の反映
- 待機児童，土日の支援拡大
- HPが読みにくいので，読みやすくする。

6) 養成校で学んだどんな内容が，子育て支援に活かせると思いますか。

- 子どもの発達段階の知識，発達過程の目安，保護者の不安な気持ちの知識，演習した経験。

- ・ 共感する気持ち，保護者とのコミュニケーションの取り方，傾聴，相談援助に活かせる。
- ・ 地域の子育て支援事業や支援サービスの理解，情報を伝える。
- ・ 母親の悩みについて，原因理解ができ相手の立場に立って考えられる。
- ・ 交流の場をつくる，親子でできる遊びの提案。
- ・ 子どもの安全を守る。
- ・ 関連機関の役割を知っていることで保護者の力になれる。

V. 地域の実態調査

就職先の内定が届き始めた時期に，今までの学びを活かしながら，地域の子育て支援事業について改めて学びを深めて調べていくことが，「子育て支援」に対しての新たな視点に繋がると考え，「故郷や就職先の地域の子育て支援についての実態調査」の課題に取り組んだ。地方出身者は実家に戻って実際に確かめながら取り組むことで，成果が上がると考えたが，授業の進捗の関係上冬季休業まで延期できない事もあり，市町村のHP等を活用して調べることにした。昨年は提出期日を冬休み後にしたため，市町村で発行している広報誌が多いに参考となった。しかし，今回は期限を冬休み開始前としたため市町村のHPの活用が大半を占めた。しかし，子育てに関する冊子もダウンロードできる市町村もあり，活用することができた。

1) 調査対象地域

表1 調査対象地域

対象地域	就職先，故郷，興味をもった地域
調査内容	市町村で行われている子育て支援事業
調査方法	広報誌，市町村のHP

調査対象の地域は，故郷の他に就職先の地域や要望もあり興味をもった地域とした。

2) 対象となった主な市町村

地域は北海道の広範囲に渡り，本州の地域も調査地域となった。

表2 対象となった主な市町村

	市町村名
道内の市	札幌市（北区・東区・白石区・南区・西区・手稲区・厚別区・豊平区） 江別市 石狩市 旭川市 千歳市 恵庭市 室蘭市 根室市 網走市 登別市 岩見沢市 伊達市 北見市 小樽市 釧路市 美唄市 三笠市 恵庭市 夕張市 帯広市 赤平市
道内の町村	七飯町 佐呂間町 えりも町 標茶町 安平町 南幌町 幕別町 厚真町 雄武町 湧別町 遠別町 音更町 足寄町 共和町 清里町 中標津町 白糠町 長沼町 岩内町
道外	千葉県

3) 道内で共通の取り組み

全道的に取り組まれている支援が見られた。地域によっては、内容が付加されたりしていた。

① 「どさんこ・子育て特典制度」

その市町村の施策について、広範囲で見えていくと、全道に渡る道の施策とその施策を広げ拡大している施策がある。これは全道的なものであり、地域ごとにも工夫されている。例をあげると、「どさんこ・子育て特典制度」とリンクさせた「えべつ子育て特典制度」である。

② 生まれた赤ちゃんへの贈呈

また全道的にブックスタートに関わる幼児に対する絵本の贈呈も多くみられる。市町村で出産に対する出産祝金を始め、食器の贈呈・椅子の贈呈・積み木・花火の打ち上げ等もある。苗木や記念樹の贈呈も見られた。社会情勢にマッチした紙おむつに関して助成を行ったり、ゴミ袋の無料提供も行われたりしていた。それぞれの市町村が子どもの誕生を特徴ある祝福する企画を行っている。

③ 子育てサロン・あそびのひろば

各地域では、それぞれ地域で工夫された「子育てサロン」が展開されていた。

④ 子育て支援の基本理念

「子育て支援の基本理念・スローガン」は子どもの健やかな成長を地域で支えていこうとする理念が多く見られた。以下のものであった。

例) 親子の成長をみんなで支え、安心して子育てできる 子どもと親の笑顔があふれるまち
 生まれる喜び はぐくむ喜び 寄り添う喜び それぞれの笑顔が輝くまち
 みんなで協力 子育て応援のまち
 子どもをまんやかに
 子どもが、親が、地域が育つ 明るい子どもの未来づくり

居場所交流の子育て支援のめざすところは、「関係が育つ」「子どもが健やかに育つ」「親が育つ」という関係性が育つ場作りである（高山氏）。それぞれの市町村の目指している理念にも子育て支援を通して、親や地域の関係や成長が期待されている。

4) 地域で異なる支援

子どもの通院医療費支援の年齢対象が大きく異なっていた。札幌市は令和2年4月より小学3年生まで拡大して子どもの通院医療費の助成を開始する。中学生まで助成の枠組みをすでに広げている地域も見られた。また小中学生の給食費等の無償化や高校生に対する通学費等の助成等も手厚くされている地域もあった。この資金源としてふるさと納税の活用を行う市町村もあった。また他の地域からの移住者に対しての助成も効果をあげ、人口が増加している町村もあった。

5) 調査後の学生の感想

地元の子育て支援事業の内容を、調査をして初めて知った学生が大半を占めた。調べる手段として市町村のHPからの情報が多いに役立った。今までに自ら調査する機会がなく、なかなか知る機会も少なかった。生まれ育った地域がどんな子育て支援施策を行っているのか自分からはなかなか知りたいとは思わず、学びが広がっていかないであろう。学びが広がっていくためには、意図的に調査する機会を得ることが大事であると実感した。実態調査に対し意欲的に取り組む学生も多く、子育て支援施策が予想していたより多いことに驚きがあった。

感想を取り上げてみると、以下のようであった。

- ・「ぼこあぼこ」でクリスマスコンサートに出て歌い手遊びをしています。保護者もニコニコと笑って楽しい雰囲気が流れている素敵な空間だと思う。こういう場所がもっと認知されていけばと思う。
- ・花火や米、食器など様々な独特なキーワードが出てきて驚いた。未就園児の保護者がリフレッシュできる環境を作り、心身の不安を溜めない様にすることが大切。
- ・地域によって支援が違うことを改めて理解した。
- ・自分も人的社会資源になり、地域に貢献できる人になりたい。
- ・夫婦だけではなく地域で助け合うことができそうである。
- ・今まで他の地域に目をむけることはなかったの、いい機会になった。
- ・自分が親になったら利用したい。
- ・親のリフレッシュは大切である。
- ・地域で一丸となって子育てを支えていくことがとても重要である。

調べた後の感想で、他の地域の子育て支援の事業がについて関心をもつ学生もいた。そこで

- ①日本全体で一律に取り組まれていること
- ②北海道全体で取り組まれていること
- ③地域の特徴ある取り組み

の観点で、調査した主な支援事業を講義で取り上げた。

児童手当等については、全国一律に同じではあるが、通院医療費等の助成は地域によって対象年齢も様々であり、地域は限定せずに取り扱った。赤ちゃんの誕生を祝って、記念品や祝い金、イベントでのお祝いや、紙おむつのゴミ袋の無料化や紙おむつ代の助成も行われていた。個人の調査だけではなく、他の市町村の事業を知ることで、刺激となった。なんらかの子育て支援施策が行われていることは予想してはいたが、予想していたよりも多くの事業に取り組んでいることに驚きや、ふるさと自慢にも繋がった。

VI. 子育て企画

子育て家族に対して「明日からの元気が出るイベント」を企画しようというので「保育実践演習」で取り扱った。今年は、地域をエリアに取り入れた企画を出した学生もいた。子どもの成

長を感じるとともに小学校入学に向け、子どもの活動・行動力を増やし、地域と関わっていくという目的で「はじめてのおつかい」という企画が出された。「子育て支援」には、地域との繋がりも大事で、地域の協力も不可欠であるという学びとなった。

また、企画した子育てサロン企画の広報活動として、ちらしづくりに発展させた。今年はPCを使用したちらしも少し多くなってきた。内容的には、アイデアが浮かばない学生も多くアイデアを産むための支援もさらに考えていかなければならない。

Ⅶ. 地域の子育てサロン見学

地域の子育て支援としての「あそびのひろば」の開催は、午前中に行われているところが多い。学生は授業の空き時間に参加や、見学することは難しかった。文京台地区唯一のひろばが文京台地区センターでの行われている。昨年見学させていただいた「ひろば」の見学を江別子育て支援センター「すくすく」にお願いをして許可をいただき、教員のための訪問となった。昨年度とは主催先が変わり、現在は子育て支援センター「すくすく」が運営を行っていた。昨年「ひろば」に参加していた幼児は、ほとんどが就園する年齢となり姿はなかった。今年は子どもの年齢が0歳～2歳であった。最年少は3ヶ月の乳児で機嫌よく参加していた。支援員は保育士2名と地域のボランティアとして児童委員1名であった。室内20畳の和室に運び込まれた遊具が、5ヶ所に配置されていた。やってきた1歳に未満の乳児さんは、座ってボランティアの方と車の玩具のやり取りを楽しみ始めた。保護者は乳児さんの後ろに位置しやり取りを見守っていた。乳児さんの行動を観察させていただいた。



写真1



写真2

手作りの太鼓が用意され、バチで叩くと音がする様子を、ゆっくりと何度も乳児の目の前で見せた。しばらくしてバチを差し出すと手を出してバチを握って叩く仕草を始めた。発達段階としては、握ることができる頃なので、上手に握って叩こうとするが、なかなか上手にはできない。しばらく他のお子さんの遊ぶ様子を見せていただいてから、もどって様子を見ると、「はいどうぞ」と言われバチを渡されると、太鼓を叩く仕草が上手になっている。周囲の人に褒められニコニコ顔である。保護者の方も「こんなにできるようになるのね。」と我が子の短い間の成長を喜んでいた。支援員さんたちとのちょっとした交流を通して子どもへの関わり方

を学んでいた時間であった。このように親子が関わり合って学べる環境作りを用意することの大切さを感じた。奥の部屋では、保育士さんとお二人の保護者が子育ての悩みについて、交流していた。保育士さんはお二人の保護者のお話に傾聴して話題を深めていた。その間子どもは安心して、一人遊びを楽しんでいた。ちょっとした相談やいっしょに話せる子育て仲間がいることが、子育てにおいて大きな力になっていく。また機会を作って訪問させていただき、学ばせていただくことにした。この未就園の参加乳幼児の「あそび」の様子を画像で、講義の中で伝えると、「あそびのひろば」の実態が少し学生に伝わった。玩具を中心とした環境作りの大切さも感じたようである。

VIII. 終 わ り に

理想的な地域社会とは、地域の人全体で子育てを支援できる社会を考えている学生が増えた。人の繋がりが強い社会。家族だけではなく地域の人との協力・連携を行い子どもが地域や地域の人々に親しみを持つことで、人との繋がりの温かさ、思いやりの心を育む。また保護者が地域の人々との繋がりを持つことで、子育てのしやすさや安心感を得る。今回は子育て支援事業を身近な故郷、住んでいる地域から目を向けさせ意識付けた。しかし、実際には見えていない事業に関しては浅く捉える傾向が見られた。もっと「子育て支援」の実態を伝えていかねばならない。これからさらなる授業改善が必要と考える。保育者としての高い力量と専門的知識がさらに必要である。保育者養成段階として育ちつつある、保護者に寄り添おうとする意識を大事に育てていきたい。そのためにも子育て支援のイメージをこれからも深めていきたい。

参 照

道内各市町村HP

厚生労働省（2018）「人口動態統計月報年計」

総務省（2019）「人口ピラミッド」

北海道情報統計局・江別市（2018）「北海道合計特殊出生率」

高山静子（2009）「育つ・つながる子育て支援」（チャイルド社）P.13

高山静子（2018）「子育て支援の環境づくり」（エイデル研究所）

中島啓子 工藤ゆかり（2019）「江別市・札幌市の子育て支援の現状と保育者養成における子育て支援力の養成（北翔大学北方圏学術情報センター年報 Vol.11）P.25

内閣府（2017）「平成29年版少子化対策白書」P.47

小口恵巳子（2018）「家庭支援論」（一藝社）P.6